

ブドウ栽培の丘の風景

ジャン・コラルド

よく次のような質問を耳にします。「なぜブドウ栽培者は石ころだらけの丘の斜面にブドウを植え続けるのですか。あのような場所では耕作に適した土の層は50センチがせいぜいです。下の平地のほうにはもっと深くで豊かな土があるというのに...」。それに対して、運命論者ならおそらくこのように答えることでしょう。「それが伝統であり、現役の彼らとしては父親の栽培法に従っているだけのことで、父親は父親で先祖からそういった方法を受け継いできたのだ」と。信心深い者ならそれは神のご意思によるものだと言えるかもしれません。

一説によると、天地創造の折、神は本質的には完璧であらせられるものの、幾分思慮に欠けるところもありだったのだそうです。聖書に書かれているとおり、神は水から地を切り離された後、植物をお造りになり、そのおかげで人間は生きる糧を確保できるようになりました。神は将来主食となる穀物に最良の土地を割り当てられたのです。ところが、よい土地がすべて分配された後、神の御手には自らのプログラムに入れ忘れになられたブドウの苗木が握られていました。急ぎあれこれ検討された結果、ほかのいかなる植物の栽培にも適さない石ころだらけの丘の斜面しか残っていないことにお気づきになられたのです。神はブドウに恵みを垂れ、それを栽培することになる人間に最高の満足を与えるために、あそこならブドウが自身の最良の部分を引き出せるだろうと、ブドウに割り当てたのがこれらの土地だったのです。

これはもちろん風説にすぎません。ブドウはどのような土地でも栽培できるものではなく、水はけの悪い場所には順応しないことは経験からとくにわかっていましたので、水はけのよい石灰質と粘土質の砂礫が堆積した私たちの丘の斜面こそまさにブドウの栽培には適した土地だったのです。さらにブドウは日光にさらすことが特に大切なのですが、ソーヌ川の平地に沿って続く日照に恵まれた私たちの丘陵地帯は、その意味でも適しているといえます。

ともかくにも詩人のヴィクトル・ユゴーはっています。「Dieu n'avait fait que l'eau, l'homme, lui, a fait le vin (神は水を造っただけだが、人間はワインを造った)と。

しかし魔法の杖の一振りですべてが造られたわけではなく、私たちの祖先がいうところの魔法のナカマ(*1)で造られたのです。「Gaulois (ガリア人)にとってのいわばシャーマン(まじない師)で

Jean Collardot / ジャン・コラルド

1925年、フランスのニユー＝サン＝ジョルジュ市生まれ。69年から95年まで同市の文化・都市計画担当助役を務め、現在「ブルゴーニュワインの騎士団」長老。外国語、歴史、宗教哲学、デッサン、絵画について造詣が深く、7カ国語を解する。



あったドルイド僧(*2)の象徴が、後に「GOUZOTTE (グーズット)」という名前でブドウ栽培者の作業用具となったのが、ナカマです。さまざまな自然の要素を活用する術を心得ていたブドウ栽培者のおかげで、今日私たちは丘の風景の美しさに見とれて、ワインの風味を大いに楽しむことができるのです。

当初はブドウの栽培についてなにも明らかにされていませんでしたので、丘の斜面はやせた牧草地として山羊や羊にとって役立つのがせいぜいの石の堆積としか見えませんでした。そのような状態が数百年続きましたが、突然、外的要因が状況を一変させました。それはジュリアス・シーザーによるガリアの征服でした。

ガリア人は森の中で生活し、樹木の活用に長けていました。他方、ローマ人といえば石の文明です。征服した領土に住み着くために、彼らは兵士の野営地の設営、ついで道路、荘園、神殿の設置に必要な材料である石を探し始めました。彼らが探し当てた材料は、丘の斜面にふんだんに露出していたというわけです。そして石を掘り出した跡には、土の窪みが現れました。こうして自然と土地の小区画ができ、そこにローマの兵士たちはブドウを植えたのです。地元の農民は、経験に基づいてブドウを栽培する彼らの手本に従ったのですが、いくつかの大修道院が最初の「domaines (ドメーヌ)*3」を形成し、その知恵を栽培の改良に生かすまでその状態は続きました。

今日私たちが目にしているブドウ栽培の丘の風景はこうにしてでき上がり、その後も時の流れとともにさまざまな変貌を遂げました。ブドウは初め圧条法(取り木法)によって繁殖させました。ブドウの小枝はたわめて土中に埋めさえすれば、根づいて新しい株を生むからです。しかし、この繁殖法は植栽に一種の無秩序をもたらすので、スキヤツル/ハシを使って手で行われていた栽培を容易にしてくれることはありませんでした。

その後、ブドウの根を襲う害虫で、1880年代にフランスのブドウ畑を全滅させた張本人である「PHYLLLOXERA (フィロキセラ)*4」の到来により、すべてのブドウの木の伐採が必要になりました。ブドウの木は接ぎ木したアメリカの苗と一緒に植えかえられました。こうして取り木法が禁止された結果、ブドウ畑は私たちが今日知っているような整然とした配列と幾何学的な外観をもつようになったのです。

ブドウ栽培が行われる以前にも、丘に表情をもたせることについて



ミュルジュール

私たちに考えがなかったわけではありません。前世紀の半ばまでは、モモを始めサクラ、ナシ、アーモンドといった果樹が丘の風景を彩っていました。ブドウがまだ眠りから覚めないうち、アーモンドの開花によって最初に春の訪れが告げられます。次に、「サクラは自分より白いものを見ながらない」ということわざどおり、なごり雪がなくなるころサクラが開花します。最後が一番数の多いモモですが、それらが開花した様子はまさにバラ色のじゅうたんを敷きつめたようでした。

しかし、このような春の美しい光景も機械化とともに消え去る運命にありました。それまでは、スキを引いていた馬は木々と仲良くやっていました。ところが、無遠慮なトラクターが登場した途端、動き回るのにじゃまとはかりに木々を追いやり始めました。こうして木々は犠牲になり、色彩豊かな春の詩情ともども消滅してしまったのです。

そのうえ、機械式農具は丘の風景の別の側面を変えた張本人でもあるのです。ブドウ畑の区画が形成された当初は、除石作業が行われていました。地表の石や、後日スキで深く耕したときに地中から掘り出される石を集めて山積みする作業です。これらの石の山はブドウ畑との境目にあり、「MURGERS」(ミュルジュール)と呼ばれる石垣を形作っていました。手押し車の装備がなく、石をもっと遠くに運ぶ手段がなかった当時のブドウ栽培者にとっては、これが最も現実的な解決策だったのです。時の経過とともに灰色を帯びた、そして丘に沿っていたところに見られた石の山は、土木用重機の犠牲者である木々とあい前後して姿を消しました。この重機のおかげで、ブドウ栽培者は耕作面積を少しでもかせぐために土地の隆起を削り穴を埋め、自分の畑を立て直すことができたのですが…。

こうした状況の中で、過去を物語る証人である「CABOTTES」(カボット)も消えていきました。カボットというのは、ブドウ栽培者が悪天候に襲われたときに避難所の役目を果たす、石でできた小さな建物のことです。そこに農具をしまうことも、もちろんそこで腹ごしらえをして元気を取り戻すこともできました。昔は、ブドウ畑で働いていた人々は仕事場まで歩いていきましたので、昼食のために自宅に戻ることも問題外だったのです。

今日でもいくつか残っているカボットは、さまざまな外観を備えています。ミュルジュールを作ったときにそこに穴をあけただけの最も簡単なものから、かつては城館の中に設けられたハト小屋を思わせ



カボット

る入念に作り上げられたものまであります。

今日ではこういった過去の遺跡をめぐる意識改革が進み、残存しているカボットを修復した村もあります。見学ツアーも催行され、古きブルゴーニュのイメージを思い起こすことができるようになりました。

(* 1) 鉈鎌。鎌に鉈の柄をつけたもの。

(* 2) ガリア人とはガリア地方に住んでいたケルト人のことを指すが、そのケルト社会で宗教的指導者の立場にあった聖職者のことをドルイドと呼んだ。

(* 3) ブドウ栽培から瓶詰めまでを一貫して行うブドウ園

(* 4) ブドウネアプラムシ

—ジャン・コラルド氏について

私がコラルド氏に初めてお目にかかったのは今から10年以上も前、「Confrérie des Chevaliers du Tastevin」(ブルゴーニュの騎士団)の騎士に私が叙されたときです。1934年に創設されたこの団体は、各界の著名人から一般のワイン愛好家まで幅広い支持を得、今では世界に約12,000人の会員を擁しています。95年には日本にもその支部が開設され、現在120余名の会員を数え、会長は伊藤恒氏(元ホテルニッコー会長)、私は専務理事を仰せつっております。コラルド氏は47年からこの団体の活動に参加され、現在「Grand Prévôt」(グラン・プレヴォ)＝フランス王政下で使われていた要職名の一つという役職についておられます。

コラルド氏は1925年、Nuits-Saint-Georges(ニュイ＝サン＝ジョルジュ)に生まれました。大学を卒業後、長い間市の文化および都市計画担当助役を務められ、90年に一線を退かれてからも、外国語、歴史、宗教哲学、ドイツ語、絵画について深く学ばれ、フランス語はもとより、英語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、日本語の7カ国語を話されます。

ここ最近、年に一度は来日されておられるコラルド氏に、今般、当誌への寄稿をお願いしたところ、氏はご快諾くださいました。ワインを中心とするブルゴーニュの文化全般に関わるエッセイをお願いしておりますので、ぜひ皆様にもその世界を楽しんでいただければと思います。

なお、日本語への翻訳は弊社・業務室が当たりました。

佐多保彦

ブルゴーニュへ、ようこそ

中世的に思っているブルゴーニュはいちいちありません。
機上の絶頂を生み出すぶどう畑、グルメ/ワインの数々、
中世のまの前の街なみ、美しく広がる大地や、小さな村々、
豊かな生命力は、はたの心ゆくを感じさせる地方、
それがブルゴーニュです。

お問い合わせ
(株)佐多商会業務室 担当: 岩沢
Tel. 03 3582 5087

